

から、老人だからといったことを理由として居住する社会から疎外されることはない。すなわち人権問題が解消される社会である。

コミュニケーション手段の共有

「障害」は、「同時代に生きる圧倒的多数の人々とのコミュニケーション手段を共有することができない事態が恒常的に続く状態」ということができる。なかでも、脳の障害に起因し、社会に成立している様々な規範を行動水準で獲得することに困難が生じる「自閉症」、運動機能の不全と知的障害、視覚障害や聴覚障害等の感覚障害を併せ持つ「重度重複障害」のある人々には、この点に大きな困難があるといえる。これらの人々にとっての困難は、感じていること、考えていることが他者に伝えられない、他者から分かりにくい事態の中に生活していることだ。その結果、ストレスのとても高い日常生活が続くことになる。

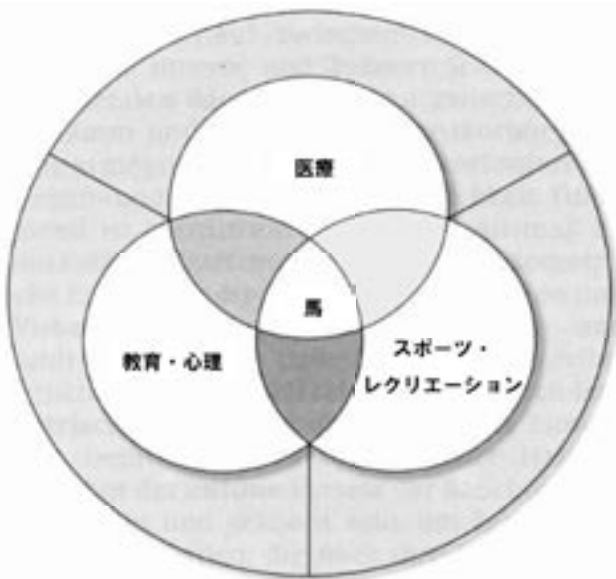
また家族をはじめ周囲の人々にも高いストレスが生じることになる。そして、周囲の人々が「(障害のある)この人は何もわかっていない」「(障害のある人は)自分と同じようには感じていない」といつの間にか思い込み、赤ちゃんに接するときのような言葉遣いや接し方をしてしまうような事態が生じる。同時に、障害のある人々が自分を表現しようとすることを諦めてしまったり、相手に合わせて「何も分からない赤ちゃん」のように振舞ってしまったたりということが起こりえる。これらのことは、私たちの大多数が、ある「表現の様式」を無意識のうちに身につけ、それができることを当たり前としていること、しかし障害のある人々にとっては、中枢神経系の損傷等によってこの「様式」を身につける(学習する)ことが難しく、異なる様式を身

につけてしまう、あるいは身体の動きが異なる様式をとってしまう事態のなかで起こる。この「様式化」の困難をどのように軽減できるか、どのようにしたら様式化に困難のある人々への理解に近づけるか、コミュニケーションが可能になるか、「万人のための社会」を実現しようとしたとき、この課題を解明し方法を開発していくことは不可欠な内容だと私は考えている。

心身一元の「表現様式」

私たちは、姿かたちが異なりことばを話さず他の表現の様式をもつ様々な動物たちをパートナーアニマルと呼んで、それらとの心のやり取りや、心の変化の読み取りを工夫する。それにもかかわらず、同じ人間である障害のある人たちの異なる表現の様式に対して「通じない」「わからない」と苛立ちを感じてしまうことがある。「同じ姿」をしているがゆえに「私と同じようにできて当たり前」という意識が生じ、そのことによってこのような態度は生み出されるのだろうか。

さて、「身体の動きの様式化」ということを考える際に大きな手がかりとなることの一つに「私たちの身体には必ず内的な過程(心)が表出する。私たちの身体と心はそのようなものとしてある」ということがある。例えば、身体がリラックスしたとき、心もまた必ずリラックスしている。私たちは、「心はリラックスしているが身体は緊張している」ということができない。私たちは生きていて覚醒している限り必ず心に動きがあり、それは身体や身体の動きに必ず表出する。そして、私たちは社会に生まれ生きることによって無意識のうちにその社会に成立している表現の様式へと身体の動きをつくっていく。この「共有された様式」が「相手を理解する」また「コミュニケーションが成立する」ことの大きな基盤になっている。



<治療的乗馬>三つの領域
Strauß, I. (2000) を改訂



馬と触れ合う高齢者